

V 五台地区

(後台 中台 東木倉 西木倉 豊喰 (津田))



V ^{ごだい}五台地区

概 観

五台地区は、後台・中台・東木倉・西木倉・豊喰の各大字から成っている。

江戸時代にはこの大字がそれぞれ一つの「村」を構成しており、中台村・東木倉村などと呼ばれていた。各村には庄屋（名主）がおり村政を担っていたが、明治4年に廃藩置県が実施され、区長が置かれることになった。その後明治22年に至り、全国的な規模で町村合併が行われた。当時の茨城県には2,000以上の町村があったが、町村合併以降は1市・10町・335村となる大合併であった。

この大合併を受けて五村が一つにまとまり、「五台村」が誕生した。五台村はこれ以降60年以上継続したが、昭和30年に至って周辺の町村と再度合併し「那珂町」が発足した。さらに平成の大合併により「瓜連町」と「那珂町」が合併し「那珂市」が誕生し現在に至っている。

水戸市方面から那珂市に向かって北上する場合、最初の入口の一つが五台地区である。五台地区には国道が2ルート走り、JR水郡線も北に向かっている。那珂市にとっては重要な玄関口となっている。



現在の地形図（国土地理院）



国道349号・旧道との分岐点



明治40年代の五臺村（大日本帝國陸地測量部）



昭和36（国土地理院）

左図は明治40年代の地図である。当時の五台村役場は、太田街道沿いにあった。現在の五台郵便局のやや北側に当たる。地図上の表記は後台ではなく、「五臺」となっている。

<役場・教育施設>

明治 21 年に町村制が施行され、同 22 年 4 月に五台村が発足した。後台・中台・東木倉・西木倉・豊喰新田の五地区からなり、役場は後台に置いた。当初は村長、助役、収入役、書記 4 名で村政を行った。また村を 10 区に分け、それぞれに区長を置き村政の補助機関とした。太平洋戦争当時は区長制をなくし、地区会長制をとった（役場位置は前述）。

歴代村長

植田 敏行	(明治22年 6 月～)
山田 貞成	(明治31年 5 月～)
後藤 甚次郎	(明治35年 3 月～)
根本 信之介	(明治38年 7 月～)
後藤 武彦	(明治40年 4 月～)
海野 熊次郎	(大正 8 年 5 月～)
石川 丑五郎	(昭和 2 年 5 月～)
三田寺 午之介	(昭和 6 年 3 月～)
石川 佐吉	(昭和10年 5 月～)
根本 秀之助	(昭和14年 5 月～)
植田 菊之助	(昭和22年 4 月～)
山田 子之助	(昭和23年 6 月～)



五台村役場

○初期の小中学校（現在の学校については後述）

五台小学校は明治 22 年 4 月、東木倉の地に五台尋常小学校として設立され、後台に分教場が設置された。同 32 年には第一尋常小学校、第二尋常小学校と改称。同 42 年に第一・第二を統合し東木倉に五台尋常小学校、後台に分教場を設置。大正 15 年 4 月に現在地に移転・開校。



五台小学校

五台中学校は昭和 22 年 5 月に五台小学校に開設した。

その後徐々に校舎や設備が拡充され、昭和 25 年に校舎 1 棟が竣工、同 34 年に図書室を新設。同時にテレビも設置された。



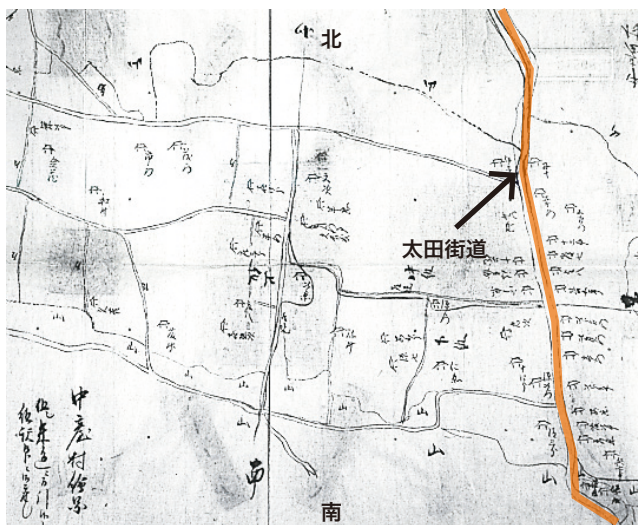
五台中学校

2 なかだい 中台地区

＜村絵図＞

右図は江戸時代（天保年間）に描かれた中台地区の絵図である。図の東側を南北に貫いている道路が太田街道（棚倉道）であり、この街道に沿って民家が並んでいたことがわかる。街道西側にも民家が点在し、小さな集落を形成していた。江戸時代には「中だい」や「中田井」の文字も使われていたようである。絵図には「中臺」の文字が見え、明治の地図（121 頁）でも同様である。

昭和 50 年代に入ると交通緩和のため、旧太田街道や水郡線の東側に新しく道路が建設された。この道路が現在の国道 349 号線である。片側 2 車線の立派な国道となり、朝夕の通勤・退勤時間帯には多くの車が通行するようになった。



中台村絵図

＜外記塚＞（息栖神社の北西 200 m の山中）

『水府志料』中臺村の項に「古墳外記塚と称す」とみえる。この一帯は、天正 18 年（1590）佐竹氏と江戸氏が戦った古戦場の跡と言われている。この戦で江戸氏側についた永井外記が戦死したため、塚をつくり葬ったとされる場所が「外記塚」である。

外記塚の所在する辺りは、現在「羽黒前古墳群」に指定され、円墳 2 基が現存している。これまで古墳の調査等を行われず、詳細は不明であった。しかし、数年前に太陽光発電施設の建設が計画され、古墳の範囲を確認するため試掘調査を実施した。この時 2 基の円墳の東に古墳状の高まりが確認され、これを 3 号墳として追加し調査した。その結果、3 基とも周溝（古墳の周りに廻らされた溝）が検出されず古墳ではない可能性が高まった。過去に古墳調査では全て周溝が検出されていることを考慮すると、古墳ではなく、塚の可能性が極めて高い。古文書にみえる「外記塚」であるかもしれない。左図青丸の高まりがこれに当てはまると推察される。



羽黒前古墳群測量図

現在では、3 基の高まりの周辺にはソーラーパネルが設置され、以前の景観は見られなくなっていました。

＜息栖神社＞

永禄 4 年（1561）の創建と伝えられ、祭神は気吹戸主命や天照大神等である。江戸時代には水戸藩七社のひとつと伝えられている。普段は訪れる人も少なく、静かな佇まいである。神社の西側は「息栖の森ふるさと公園」として整備され、バーベキュー広場やお絵かき広場などがあり、休日には子供連れの姿も見ら



息栖神社

れる。公園南側の崖下を「小場江用水」が東流している。社は一番地に所在する。



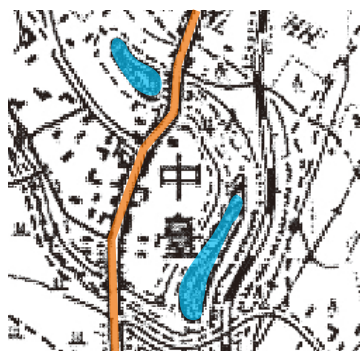
ふるさと公園



馬頭観音石塔

ばとうかんのん ＜馬頭観音＞

息栖神社参道入り口付近にやや傾いてはいるが馬頭観音の石塔が立っている。石塔はそれほど古いものではなく、昭和2年11月（1927）に設置されたものである。道路沿いなので気づきやすいであろう。今でも地域の方がお花を供えお参りをしている。馬頭観音は他にも東木倉に向かう山道沿いに数基見られる。



中台の溜池
（大日本帝国陸地測量部）

＜中台の溜池跡と油脂会社＞

左図は明治末の地図であるが、旧太田街道をはさんで2か所の溜池があったことが分かる。現在は2箇所とも埋め立てられその痕跡は全く認められず、南側の溜池跡（うしろ溜）は多くの住宅が建ち並ぶ団地になっている。

那珂市には今でも多くの溜池が残り、治水に利用されている。那珂台地上は平坦であるがゆえに河川が少なく、農作業の不便さを解消するために昔から溜池が利用されてきたと考えられる。

北側の溜池跡（前溜・女郎ヶ池）にはかつて「明糖製油株式会社」が操業していた。会社の設立は昭和26年で、毎日8,000kgの油脂を搾油し、出荷していたと言われる。

しかし、平成の末頃には操業を停止してしまい、現在は事務所・工場などの建物は残っていない。

工場の跡地は別の形で利用され始めている。



明糖製油株式会社（国土地理院）

コラム

女郎ヶ池の伝説

女郎ヶ池には昔から次のような伝説が残っている。およそ400年前のこと、水戸の江戸重通が太田の佐竹義重に攻められた時、重通の妻が中台村に逃げてきた。そこには大きな沼があったが、妻は侍女たちと共に入水してしまった。その後、様々な異変が起こるようになったため、村人たちは法要を行って、霊を鎮めたといわれる。この沼が後に「女郎ヶ池」と呼ばれるようになったそうである。

（高村 勇）

<工事中の国道 349 号線と遺跡の発掘>

既述のように、昭和 50 年代に入って新しい国道（バイパス）の新設が計画され、工事がスタートした。国道は中台入口を分岐点に、水郡線をまたいで常陸太田市方面に延びている。片側 2 車線の走りやすい道路が完成し、産業や観光の発展に寄与している。最近まで一部に上下 1 車線の区間が残っていたが、現在では全ての区間で 2 車線化され利用されている。

道路の新設に当たっては、民家を避け、畑や山林部分を通すように計画されたが、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）にかかる地点があり、工事着手前に発掘調査が行われた。

中台地区では「中台東遺跡」の調査が実施され、奈良～平安時代の竪穴建物跡や中世の地下式坑（墓壙）などが検出された。以下、国道工事中及び近年の航空写真をあげておく。

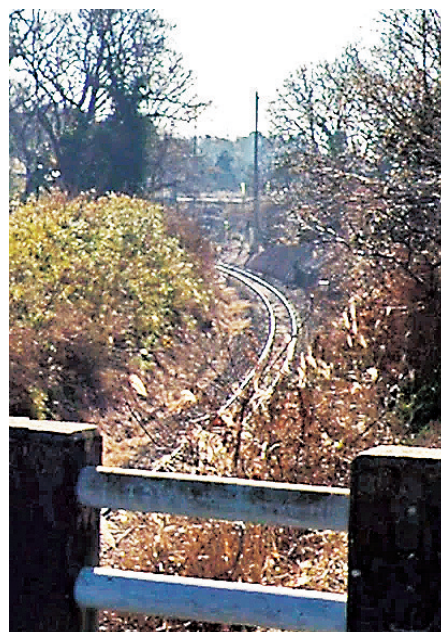


道路完成から 35 年も経過すると、これだけ周囲の景観が変わってしまう。平地林だった場所に那珂記念クリニックが建設され、大型の遊戯店や多くの会社・コンビニなどが見られるようになった。

下記の発掘調査地点は、中台東交差点の南西方向、現在の中台南交差点付近である。



発掘調査地点（昭和50年 国土地理院）



水郡線
県道38号線跨線橋より

<中台地区を走る水郡線>

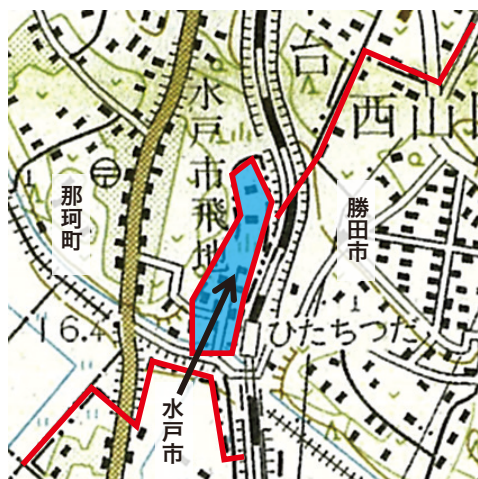
水郡線は明治 25 年（1892）太田馬車鉄道に対し軌道建設の許可が出たが、敷設前に太田鉄道と改称し、鉄道敷設に変更された。明治 31 年に、水戸～久慈川駅間がやっと開通した。

しかし、太田鉄道は経営不振が続き、明治 34 年に水戸鉄道株式会社に買収された。

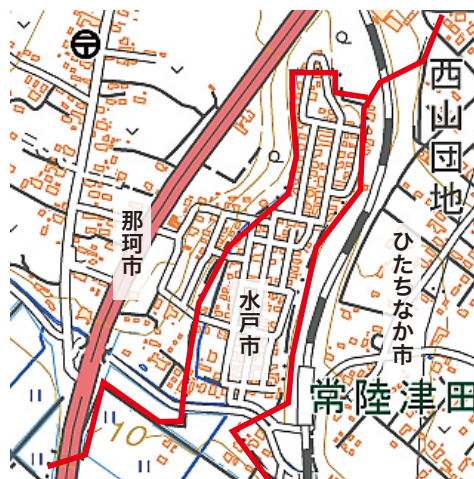
鉄道は明治 30 年（1897）には水戸-上菅谷間まで開通していたが、翌 31 年 4 月に額田（旧久慈川駅）まで延長され、さらに明治 34 年 10 月には常陸太田まで延伸された。大正 7 年（1918）には上菅谷から常陸大宮まで完成する。福島県郡山までの全線開通は、昭和 4 年 5 月のことであった。前頁の写真は県道 38 号線の跨線橋下を抜けて北に延びる水郡線である。

<旧那珂町に水戸市があった！>

中台の地にかつて水戸市の飛地が存在したという事実は、意外と知られていないのかもしれない。



昭和52年の地形図（国土地理院）



現在の地形図（国土地理院）

上の図は昭和 52 年と現在の地形図で、両図とも赤線が市町村の境界線である。那珂市とひたちなか市の境界に大きな変更は認められないが、水戸市と那珂市の境界が異なっているのである。昭和 52 年の地形図では、以前存在したうしろ溜を埋め立てた場所（水色部分）が「水戸市飛地」と表示されている。この頃は那珂町のなかに水戸市の飛地が存在していたことになる。

では現在はどうなっているのか。右図のように細長く北側に張り出した形で水戸市になり、飛地は消えてしまった。

では、飛地が消えたのはいつ頃なのだろうか。昭和 52 年発行の地図には飛地の表示があり、現在の地図では水戸市になっている。おそらく昭和 50 年代以降の何れかの時期に境界線が変更になった可能性が高い。なお境界線変更にあたっては、居住する住民と関係市町村との間で何度も話し合いが持たれ、現在の状況に落ち着いたそうである。

かつての飛地は多くの住宅が建ち並ぶ団地に様変わりしている。住宅街の道路 1 本隔てて、西側是那珂市津田であり、東側是水戸市青柳となる。

V 五台地区

